

ハイスぺ年下彼氏が

触手で愛情表現するタイプの宇宙人でした

く乳首もクリも見えないところで

ぐちやぐちやに可愛がられていますく

ある週末、彗（けい）くんのお家のソファに座って、夕食後のお茶を飲んでいるときのことだった。

「恭子さん」と呼ばれ、テレビに向けていた目を彗くんにつす。

彼は、少し緊張した面持ちをしていた。

「来月、俺の両親に会ってくれないかな？ 恭子さんを紹介したいんだ」
出会って三年、付き合って二年。

大企業の企画部でエリートコースを順調に歩んでいる彼にそう言われたから、心の内にいる私が「結婚！」と浅はかにも舞い上がってしまう。けれど、曲がりなりにも、たった一つの差しかなくても私は『年上』だ。平静を装って「ご両親、海外で暮らしてるんじゃないの？」と問い返す。

「ちようど日本に来るらしくて。それで、その……一応、結婚を前提につて、俺は、思ってるんだけど」

少し照れた様子で言う彗くんは、まるで大型犬のようだった。

高身長で、正統派イケメンで、性格だって申し分がないのに彼はいつでも謙虚だ。むしろどこか自信がなさげなところもあるから、つつい「守ってあげなきゃ！」なんて気持ちになってしまう。

「うん、嬉しい。私で良ければ是非」

「ほんと？」

「でも、プロポーズはちゃんとしてほしいなあ」

「もちろん！ ああ、嬉しいな。恭子さん、結婚式はしたい？ 指輪のブランドとかどこにしよう？ 新婚旅行はヨーロッパとかどうかな、パリの街並み、恭子さんにも見てほしいなあ」

「気が早いなあ」

私の返事にやっぱり大型犬のように喜ぶ彗くんは、言いながら私を抱きしめた。背中に手を回すと、その掌に「でも」と彼の声が響く。

私から離れた彗くんは、つい数秒前までぴっかぴかだった笑顔をどよんと曇らせた。

「えっと……実は、言っておかなきゃいけないことがあって……」

「ええ？ 何？ 怖い。もしかしてバツイチとかそういう」

「違う、そういうのじゃなくて……その……」

ぎゅっと両手を握られる。彼の表情に私も少し不安に襲われるけど、その手をぎゅっと掴んだ。

多分、大丈夫だと思った。

「教えてくれる？ 私たちの将来のためなら、私は知りたい」

「恭子さん……」

私の言葉に、彗くんは覚悟を決めたようだった。

整った顔に真っ直ぐ見つめられて、今思うことじゃないかもしれないけど「顔がいい」と思う。

そんな顔のいい彗くんは、決心を固めた真っ直ぐな目でこう言った。

「実は俺、宇宙人なんだ」

ほんと顔がいい。好きな顔。

……じゃない。いや、好きな顔だけど、そうじゃなくて、え？ 何？

宇宙人？

「見た目も身体の機能もほとんど変わらないんだけど、実は触手を出し入れてきて……」

相も変わらず真っ直ぐな目で私を見つめる彗くんは、至極真剣な声でそう続けた。

真面目で、誠実で、謙虚な彗くん。

から、触手。

……触手ってあの触手？ エイリアンとか、エロ漫画とかの。

「えっと、ごめん……ちよつと……ええ？」

「でも今まで過ごしてきて分かんと思うけど、体内に収納して人間として生きることは普通にできて、あ、それに、一応政府公認で移住してきてるし危険性とかは全然」

「待つて待つて彗くん、情報量が多……え？ 本当に言ってる？ 彗くんたまに冗談が分かりづらいときあるから」

「冗談じゃないんだよ、本当に。ごめん、親が海外って言うのも、普通に違う惑星で暮らしてるからなんだ」

「えええええ……」

言葉が上手くまとまらない。

宇宙人？ 触手？ 政府？ 移住？ 惑星？ どこからツツコめばいい？ そもそも本当に事実？ でも、彗くんがこんな冗談を言うわけがない。

冗談が分かりづらいどころかつまらないときだってあるけど、このタ

イミングでこんなことを言う人「ではないのだ。……人？　宇宙人も人か。

「ごめん。恭子さんに嫌われたくなくて、言えなくて」

私の手を握る彗くんの手にぎゅううつと力を込められる。痕がつきそうなくらいの力に少し冷静になる。

その加減のできなさも表情もいつもと変わらない、喜怒哀楽が大型犬っぽい彗くんではなかった。

冗談でしょ、なんて言えるわけがない。

「……分かった。じゃあ、その触手ってやつ、見せてくれる？」

「え……」

「言葉だけじゃ判断できないもん。触手だけなんでしょ？　人間と違うのは」

「うん……。でも、ちよつとびつくりするかもしれないよ」

「びつくりはすると思う。でも、それが彗くんの本当の姿なら見せてほしい。もし私がそれを受け入れられなかったら……その時は、どうするか考えるから時間をちょうだい」

そう伝えると、彗くんは私の手を握ったまま自身の額に持つて行き、祈るように小さく「ありがとう」と言った。

（好きだなあ）

彼の性格が垣間見える仕草に、改めてそう思った。

だから、きつと大丈夫。触手だって最初はびつくりするかもしれないけど、身体の一部でしかないはずだ。彼の性格や、今までの思い出に何ら影響はないはずだ。

「じゃあ……一つだけ出すね」

息を呑む。大丈夫。大丈夫。

ちよろっ

「わっ」

髯くんの袖の隙間から、小さなミミズのようなものが出てきて思わず声が出る。

ミミズよりは固そうなそれは、内臓らしい色で少し粘液を帯びているように見えた。

（あれっ、思ったより）

「可愛い、かも」

「あ、でもこれは意図的に小さくしてるやつで……」

「そういうのもできるんだ」

「ある程度なら形状が変えられるから」

「ええっと……これは、具体的には何に使うの？」

「うちの星は地球より重力が軽いからいろいろ使うよ。物を掴んだり、移動するときに楽したり。あと……」

「あと？」

「愛情表現とか」

すりっ

隼くんの触手が、私の掌を優しく撫でた。しとっと湿気を含んだ質感が『今まで触れたことがないモノ』で、思わず「ひやつ」と声が出る。

「ごめん、びっくりしたね」

「ご、ごめん。質感にびっくりして」

「少し湿ってるの分かる？ 人間が好きな人を前にしてドキドキするのと同じように、触手も好きな人を前にするところやって分泌をしちゃうんだ」

「分泌、って」

「簡単に言うと、媚薬」

「媚薬……」

「生殖機能のお手伝いって感じかな。だから今、恭子さんを前にして分泌してる」

「……！」

するり……♡

隼くんにかつちりと掴まれた手に、触手が絡みつく。

媚薬と聞いたからか、いやにドキドキしていた。

「恭子さん」

二年付き合って、何となく彼の言いたいことが声色だけで分かるようになってしまった。

彼の欲を感じ取った秘部がじわあと下着を湿らせる。

「俺の全てを、受け入れてくれる？」

恐怖がなかったわけじゃない。それでも、気づけば私は小さく頷いていた。



「ありがとう、恭子さん」

二人して寢室に赴き、ベッドにぎしりと倒れ込みながら口づけをされた。

「ん……ッ、んむうっ……♡」

落ち着いた声とは裏腹に熱いキスに呼吸を奪われ、組み敷かれる。

その隙に彗くんは私の服をどんどん脱がしていき、あつという間にショートとブラジャーだけになってしまった。私にキスをしながら、彗くんも服を脱いでいく。

「今日の下着、可愛いね……新調したの？」

「で、電気消して……」

「どっちが怖くない？」

する……っ♡

触手が私の頬を撫でる。

暗い中この触手に触れられることを想像すると、何故か胸が高鳴った。
恐怖なのか、期待なのかよく分からない。

「えっと……」

「常夜灯にしようか」

私の戸惑いを察したのか、彗くんはリモコンで小さな電気を灯してくれた。

優しい。そういうさりげない優しさが好きだと思った。

「ありがとう……」

「こっちの台詞だよ。やっぱり怖いよね、少しずつでいいから」

「ん。……あッ♡」

すり……♡

頬にキスをされて喜んでいたら、さっきより太い触手がブラジャーの上から乳首を擦って声が出た。

指くらの太さだろうか。指とは違った弾力で、見えないはずの乳輪をなぞるようにすり♡すり♡と円を描くから背中がぴくぴくと動いてしまう。

すぐにもう一方にも触手がやってきて、同じように弾力を持ちながら乳輪をなぞっていった。

「あ……ッ、は、ん……♡」

「まずは布の上から触るね」

「んんッ……♡」

ぬりゅっ………♡

新しい触手がやってきて、今度はクロツチの部分を擦られる。ビクツと腰が震えても触手はきちんと私のおまんこを追いかけてきて、すでに濡れてしまっているそこを上下に撫でた。

いつもと違う感覚に愛液は止めどなく溢れ、触手の粘液が混じって布越しでも、くち♡くち♡と音がする。

「足、広げて」

「あっ………♡」

ぬう………♡

四本目の触手が私の足を持ち上げる。濡れて色を変えたクロツチを髀くんに見せつけるような体勢に、恥ずかしさが募った。

「やっ………あんツ、んっ♡ これ、恥ずかしい………っ」

「可愛いよ、恭子さん」

彗くんは愛情たっぷりにそう優しく言うけど、触手は感情を持たないみたいに私のおまんこをショーツ越しにぐちぐち♡と執拗に擦り続けた。柔らかで甘い刺激に、腰がどんどん浮いてしまう。

「下着、すっごく濡れてるね。これって触手の粘液じゃないでしょ？」

「言わないで……ッああ、あッ、ん……ッ♡」

「怖くない？ 気持ちいい？ こんなに下着濡れちゃってたら、粘液ももう恭子さんのおまんこに届いちやってるだろうなあ」

「わ、わかんない……ッん、あっ♡」

実際、異物感へのドキドキなのか媚薬によるドキドキなのかは分からなかった。

ただ「いつもと違う」というその事実が確実に私の愛液の分泌を加速させていて、粘度の高い音をにちにち♡と響かせている。

「クリトリスもピン♡って勃っちゃって、頑張って主張してるの可愛い

ね」

「おッ♡」

くりっ♡　ぐにっ♡　ぐりぐりぐり♡

五本目の触手が私のクリトリスを弾いて、潰して、こねる。舌のような指のような質感だ。

それに敏感になってしまったクリトリスをいじられると、浮き上がった腰がカクカクと揺れた。触手で足を掴まれているから、どこにも逃げようがなくて声が出る。

「そこだめッ♡　ぐりぐり♡しちやだめえっ♡♡」

「気持ち良さそうに腰へコへコしてるの？　せっかくだからたくさん気持ちよくなつてよ、恭子さん」

ぐりゅぐりゅ♡とクリトリスを押し潰される刺激に抗えず、息がどんどん熱くなる。

その間も乳輪とおまんこをすりすり♡とする触手は動きを止めず、そうやってじんわりと高められた快感は、クリトリスを弄られるたびに強く揺さぶられるようだった。

「ああッ♡ や…ッ、んんっ♡ 全部、触っちゃ、ッ、やあっ♡ あッ、やッ…：…んあッ♡」

「指だけじゃこんなことできないから、いつももどかしかったんだ。本当はもっと気持ちよくできるのにつて」

ぐりッぐりッぐりッ♡

嬉しそうに話す慧くんはクリトリスをこねる触手の圧を強くした。

痺れるような快感が電流のようにクリトリスから子宮へと届き、上擦った声が止められない。

「らめえッ♡ けいくんっ♡ これっ、も、イっちゃっ…：…ああッ♡」
「うん、イっていいよ。もう下着どろどろだから、このあと脱いじやお

う」

「おあっ♡ あ、ッあ、だめ、だめッ♡」

ぐちッ♡ ぐちッ♡ ぐちッ♡

こりッ♡ こりッ♡ こりッ♡

すりッ♡ すりッ♡ すりッ♡

愛液ですっかり濡れてしまった下着が、触手の粘液と混ざり合って粘っこい音を出している。

隼くんが言うように粘液が浸透してきたのか、布越しなのにビリビリとした快感で膣内が甘く痙攣していた。

「イきそう？ 恭子さん」

「んッ、んッ♡ イくっ、もっ……ッあ、んん……ッ♡」

「うん。じゃあ、吸ってあげるね」

「えっ？ おッッ、おああっ♡♡」

ぢゅううううううっ♡

クリトリスをこねていた触手が、腫れ上がったそれを包んで吸い上げる。吸盤に張り付かれて引っ張られるような感覚に、一瞬頭が真っ白になつて甘くイってしまう。

けれど触手は止まつてくれなかった。達した余韻が引く暇もなく、ぢゅうううううっ♡すりすり♡ぐちぐち♡とみつともない顔で喘ぐ私を責め立てる。

もうどこを触られて気持ちよく感じているのかすら分からなかった。

「あおッ♡♡ あ、お、何これっ、おッ、おあッ♡」

「ちよつとイっちゃった？ ごめんね、もつと深くイキたかったよね。

吸いながらこねこね♡してあげる」

触手がクリトリスを包み込んで吸い上げたまま、敏感になりきったクリトリスの先端に圧を加えながらこねこね♡と動きを変える。

きゆうきゆう♡に吸い上げられた身動きの取れないクリトリスをどうにか逃がそうとするけれど、足を掴む触手の力が強くて腰を反らしながら膝が大きく揺れた。

「んおあッ♡ だめだめだめッ♡ こねこねしないでえッ♡ あゝゝッ♡ イったッ♡ イったからあッ♡」

「ああ…：恭子さんが俺の触手でこんなに感じてくれて嬉しいよ」

「やだあッ♡ あ、おッ♡ イってるッ♡ イってるのっ♡」

ぢゆうぢゆう♡とクリ吸われ続ける快感に、乳首とおまんこのすりすり♡が加わると息をつく暇もない痺れるような感覚で絶頂の付近を行ったり来たりしてしまう。

膝をぶるぶる震わせながら、よだれを垂らす。

「恭子さん、クリトリス虐めるの好きだもんね。だからずっとこうしてあげたかったんだ、こねこね♡ちゆうちゆう♡ぐりぐり♡ってさ」

ちゅぽッ♡　ちゅぽッ♡　ちゅぽッ♡　ちゅぽッ♡　ちゅぽッ♡

クリトリスを吸い上げていた触手が、今度は吸っては離れ、吸っては離れとリズムカルに吸引を繰り返す。隙間なく吸い上げられ、感じたことのない快感に濁った声が零れた。

何度もしたはずの絶頂の、もう一つ上の絶頂があることに気づいて少し怖くなる。

それでも私の嬌声は自分でも驚くほど甘く、その絶頂に向けて腰を震わせる。

「あゝゝゝッッ♡　だめ……ッ、イツ、くッ♡　イぐっ♡　おっきのク
るッ♡」

「顔隠さないで。こっち見て。イク顔見せて」

「だめえッ♡　見ないれえッ♡　あ、あッ♡」

乱れた顔を腕で隠していたら、触手でその腕をベッドに押しつけられ

た。

手も足もぎちつと固定されて、乳輪とおまんことクリを絶え間なく刺激されて、その刺激が下着越しなのに情けない顔と声を晒して、いやらしく腰をカクカク♡と揺らす私を彗くんが見下ろす。

「かわいいよ」

震える膝を言いつけるように掴まれて、どこにも逃げられなくなった快感が下腹部にぎゅう♡と溜まった。

ものすごい力で私の膝をがっちりと掴んで、興奮した顔を隠さない彗くんと目が合う。瞬間、クリトリスを吸い上げる触手の力が強くなった。「イカされる」という表現がぴったりだった。

ちゅうううううううっ♡♡♡

「あッ、おッッ、ああ~~~~ッッッ♡♡♡」

ぷしゃあああああッ♡

触手にイカされ、体験したことのない絶頂に腰が大きく跳ねる。潮がマツトレスを濡らし、彗くんが「はは」と笑った。

「こんなに吹いたの、初めてだね？」

「はあ……っはあ……ご、ごめんなさ……っ」

「そろそろ買い換えようと思ってたし大丈夫だよ。恭子さん、一緒に住もうよ。新しいの一緒に選ぼう。毎晩同じベッドで寝るんだから、二人とも納得できるやつにしてさ」

「う、うん……」

「もう下着はいらないね」

フランクに同棲を申し込まれて、絶頂の余韻に引きずられながらも返事をする彗くんは私のブラジャーとショーツを脱がせた。

べとべとのショーツが恥ずかしいけれど、気にする間もなく私の肌に触手がぬるぬると纏わり付いてくる。

「わっ」

「恭子さんがエロすぎて粘液がすごいことになっちゃった」

「だ、だって……」

「怖くない？」

「うん……大丈夫。ペットに懷かれてるみたい」

「だって俺の一部だもん。恭子さんのこと大好きに決まってるでしょ」
私の言葉に彗くんは照れたように笑った。可愛い。犬みたいだ。

「大好きだから、いろんなところ触りたいんだよ」

「彗くんが？ それとも触手が？」

「両方」

「ん……っ」

キスをされ、彗くんの大きな手が私の身体を這う。同じように触手たちも私の腕、腰、足をするりするりと這っていくから、そのたびにピク

リ♡と身体が反応してしまった。

「本当はもうちょつとイかせてあげたかったけど、いい？ 恭子さん」

「あッ……♡」

ずりっ……♡

甘えるように彗くんのバキバキになったちんぽが、私の濡れきったおまんこに擦りつけられた。熱くて固い裏筋が押しつけられて、ぱんぱん♡に腫れたクリトリスを掠められると、下腹部がきゅんきゅん♡と悦ぶ。触手の粘液のせいだろうか。早く入れてほしくて、息が熱くなった。

「ん……入れて……」

「やった」

ちゅ、と頬にキスをする彗くんが、コンドームを求めて立ち上がりうとする。

「あッ」

だから咄嗟に、その手を掴んで制止してしまった。

「恭子さん？」

彗くんは驚いた表情をしていた。

真面目な彼は、いつでも当然のようにコンドームをつける人だ。私もそれを当然だと思っていたし、コンドームなしでしたいという欲に負けたこともなかった。

でも、身体が勝手に動いてしまったのだ。

（今すぐ入れてほしい……っ♡）

ちんぽを擦り付けられたときからおまんこがぱくぱく♡と痙攣してたまらない。

じんじんと甘く震える子宮が切なくて仕方がなくて、彗くんの方からカウパーを見るともう私の唇は止まらなかった。

『生殖行動のお手伝い』とはよく言ったものだと思う。

「今日、安全日だから……っ」

恥ずかしさより、性欲が勝ってしまった瞬間だ。

彗くんの触手がする……っ♡と私の腕に絡みついてくる。その動きを目で追うと、触手は私の両腕を一つにまとめ上げ、ベッドに倒し、足を取って開脚させ、おまんこの肉をかき分けるようにくばあ♡と広げた。

ぎしり、と彗くんの膝がベッドを揺らす。私のぐちよぐちよ♡になつたおまんこから目を離さない彼は、凶暴そうなちんぽを手に準備しながら近付いてくる。

もう、恥ずかしいなんて言ってられないと思った。彗くんが雄の顔をして私を見下ろしている。

生殖行動を遂行する、真面目で獰猛な雄だ。

「早く入れて……っ♡」

ぐちゅんッ♡♡

「ああッ♡」

「ああもう。ダメなのに恭子さん、俺まだプロポーズしてないのに生なんて、俺が恭子さんをお願いされて断れるわけがないでしょ？」

「あっ♡ ん♡♡ あ、あ、ッんあっ♡」

とちゅ♡♡ とちゅ♡♡ とちゅ♡♡

一気に最奥まで貫かれ、その快感を保ったまま奥を何度もこっこつ♡された。

手で腰を掴まれ、触手で足を持ち上げられながら知らないところを思い切りパン♡と突かれる。

コンドームのないちんぽは微熱のような熱を持って、触手のような肌触りなのに触手とは違って凶悪なほど固かった。

「あッ、あッ♡ 生いい♡♡ すごい♡♡ 気持ちいい♡♡ あっ、あ
ん♡♡」

「あー……生やばい、恭子さんの生おまんこ気持ちいい、腰止まんないよ」

鮮明に分かるほど主張した亀頭が膣壁を引っ搔いて出して、押し込める。ずりずり♡と引っ搔かれるナカは熱いちんぽの擽猛さに溶けるように愛液を溢れさせて、ぬぷっ♡ぬぷっ♡と音を鳴らした。

ずっと欲しかったものでずこ♡と擦られて、胸がいつぱいになる。「気持ちいい」が止まらない悦びに、素直な嬌声が溢れた。

「んんッ、あ、ッは、あっ♡ おちんぽ気持ちいい♡ 生のおちんぽイようッ♡ いっぱいしてッ♡ ああっ♡♡」

「恭子さん、エロくて可愛い……」

ずちゅッ♡ ずちゅッ♡ ずちゅッ♡

慧くんは膝を裏を持ち上げられながら亀頭を子宮口に擦りつけるように突かれる。

触手も足を持ち上げるのを手伝っているからお尻が浮いて、Gスポットに近いところを何度もずりゆずりゆ♡と擦られた。

「んああッ、あッ♡ それイイっ♡ そこずりずり♡するの、イイいっ♡♡」

「ここがいい？ こう？ ずりずり♡がいいの？」

私の言葉に、彗くんが腰を振るスピードを速めた。Gスポットの近くで獰猛なちんぽがぐぢゅッ♡ぐぢゅッ♡と素早く出入りすると、また一つ甲高い声が出た。

「ああッ♡ あ、イッ♡ んっ♡ あッ、そんなにされたらッ♡ も、イっちゃッ……んッ、おッ♡」

「クリトリス、赤く腫れ上がってしんどそうだね。触手でよしよし♡っ
てしてあげるよ」

「あああッ♡♡」

こりゅこりゅこりゅこりゅ♡♡

腰を叩きつけられながら、赤くぷっくり♡腫れたクリトリスを触手でこりこり♡と転がされる。ピストンの振動だけで甘く震えていたクリトリスを可愛がられ、あまりの快感にちんぽを締め上げてイってしまった。

隼くんが「あ……っ」と小さく呻き、ピストンが止まる。

「もう恭子さん、ダメだよ。そんなに締めたら中に出ちゃうから。イくときはちゃんとイってくれないと」

「ご、ごめんなさ……っ♡♡ あっ♡♡ や、クリいじっちゃダメっ♡♡ またイクっ♡♡ からっ♡♡」

ぐぢゅっ♡♡ ぐぢゅっ♡♡ ぐぢゅっ♡♡ ぐぢゅっ♡♡ ぐぢゅっ♡♡

私を叱りながら再度ピストンを始めた隼くんは、私が謝罪を言い終わる前にクリトリスを触手でぐりゅぐりゅ♡と潰した。強い圧に足の指が固まり、膣がまた狭まる。

「あーまたイきそうになつてゐるね、恭子さんのおまんこ。ビクビクうねつてちんぽが追い出されそうだよ」

「あッ……ッ あッ♡ は、んん……ッ♡ おああ……ッ♡♡」

「触手にクリ虐められながらちんぽ締め上げてて可愛い。上手にアクメできそう？」

とちゅッ♡とちゅッ♡と急かすように奥を突かれると、アクメという言葉に囚われたみたいにそれしか考えることができなくなった。

（アクメしたいッ♡ 触手にクリをいやらしく虐められながら、彗くん
のちんぽで大きいアクメしたいっ♡♡）

「んッ♡ アクメくるッ♡ あ、あッ、おっきいのくるっ♡」

「ん、いい子だね。このままおっきいアクメしようね」

「あ、あ、だめッ♡ クるッ♡ 生おちんぽきゅうきゅうしちゃうっ♡
アクメっ♡ あッ♡」

「俺、恭子さんのイキ顔でイっちゃうかも。恭子さんがそんな顔してるの初めて見た。トロトロしてて可愛い……」

「あゝツツ♡ 奥らめツ♡ イっ……く……ツツ♡♡♡」

ぐりぐりぐりぐりツ♡

きゅううう……っ♡

彗くんにちんぽを思い切り子宮に押しつけられ、一番奥をぐりぐりと押し潰されるとすぐに達してしまった。

ビクビクっ♡と震える私に向かって、彗くんが低い声で呟く。苦しそうな顔で、肩を上げていた。

「あゝ……つぶない。恭子さん、いくとき言っつてお願いしたじゃん。酷いなあ」

「だって急に奥するから……あっ♡」

「俺もういつ暴発するか分かんないよ、赤ちゃんできちゃっていいの？」

俺は大歓迎だけど。宇宙人と地球人のハーフって、知られてないだけで実は結構いるんだよね」

「んあぁッ……♡」

とんッ♡ とんッ♡ とんッ♡

まだ膨張しているちんぽに優しく奥をとんとん♡されるだけで、また絶頂の気配がした。

ずっと痙攣している膣が、ちんぽにしがみついているようだった。しがみついているから膣壁はちんぽの硬さに嫌でも気づいてしまつて、嫌でもきゅうッ♡と締まってしまう。

「んッ、あ、彗くんッ、だめっ♡ 私またッ♡ すぐイっちゃ……っ♡」

「俺ももう限界。恭子さん、出すよ」

ごちゅッごちゅッごちゅッごちゅッ♡♡

余裕のなさそうな表情で、彗くんが腰を速めた。

触手で足を持ち上げられ、お尻が浮いた状態で打ち付けられて快感のあまり吸った息を上手く吐くことができない。それでも、果てる直前は声が勝手に出てしまっていた。

「ああ〜〜ツツ♡♡♡♡
イクツ♡
イクツ、イクツ、
イグツツ♡♡」

「あー……恭子さん、可愛い、可愛い、あー……」

「イクウツ♡♡ あ、あ、あああ~~~~ツツ♡♡♡♡」

「う……つ」

ずりゅんっ……♡
びゅっ♡
びゅるるるるっ♡

私の絶頂の痙攣とともにちんぽが抜け、彗くんの精子が私のお腹にかけられる。生温い精子がじわあ♡と皮膚側から子宮を温めて、ピクッ♡とおまんこが震えた。

「あー……いっぱい出た……」

慧くんが小さく呟く。すぐにシュツとティツシュを取る音がしたと思つ

たら、触手が私のお腹にある精子を甲斐甲斐しく拭いてくれた。

何だかそれが可笑しくて笑うと、彗くんも「何で笑ってるの？」と笑って聞く。

「なんか可愛いから……」

「恭子さんの方が可愛いよ。お顔、トロトロだね。触手気持ち良かった？」

「んっ♡」

しゅる……っ♡　くにっ♡　くにっ♡

優しい顔で見下ろしてきた彗くんの二本の触手が、私の乳首をこりこり♡と弄った。

さつきはブラジャー越しに乳輪だけ刺激されていただけだったから、やっと触ってもらえた悦びで腰が跳ね、愛液がじゅん♡と溢れてしまう。

「あん♡♡　あ、んう……っ♡　ん♡　ん♡……触手こりこり気持ちいい♡」

……っ♡」

「粘液が恭子さんの母乳出すところに入り込んでるんだね。赤ちゃんの
ために今から準備しないと」

「んっ♡ ま、まだ早い……ッよお……っ♡ はッ……あ……ッあん♡

ぬるぬる擦り付けてくる……ッ♡」

私に覆い被さったまま触手を巧みに動かす彗くんは、触手に翻弄され
る私を微笑みながら見下ろしていた。

「俺の星では母乳マッサージは夫の仕事なんだよ。こうやって、赤ちや
んが吸いやすいように触手でほぐすんだ。まず乳輪を刺激して……」

「んう……ッ♡」

すりすり♡

ぬらぬらとテカる二本の触手が、今度は乳輪を直接なぞる。ブラジャー
越しに存分に弄られて敏感になった乳首は、そのもどかしい動きに痛い

ほど膨れていた。

すりすり♡すりすり♡とまるで焦らすようにぐるぐる回る触手をつい見つめてしまうと、彗くんがその表情にうつとり言った。

「恭子さん、すっごくエッチな顔してる……。乳輪じゃなくて乳首触つて、こねこね♡ぐりぐり♡してって顔してるよ。乳首も勃起してて可愛いなあ」

「やだあ……。ッ♡ 彗くん……。っ、んッ、早く触つてよおっ……。♡」

「ごめんね、いっぱい気持ちよくさせたいけど、マッサージだから順番があるんだよ。次は勃起した乳首の周りをこしこし♡って更に勃たせて……」

「んんッ♡ あ……。ッ、んっ……。は……。ッ♡」

もう二本触手がやってきて、乳首の周りをこすこす♡とねじを回すように刺激する。

きゅつと摘まむわけでもなく、ただただ粘液を擦り付けるようにぬりぬり♡ぬりぬりぬり♡と優しく撫でられて、乳頭がジンジン♡と痺れた。足りない刺激に、思わずおねだりをしてしまう。

「あッ、は……っ♡ 早く……っ♡ けいくんッ……あッ♡ 乳首こねこね♡してえっ……♡」

「こねこね♡はまだダメ。次はしこしこ♡って伸ばしてあげなきゃ。陥没乳首の人は毎日やるんだって」

「ひゃあんッ♡ あッ♡ んんッ♡」

しこっ♡ しこっ♡ しこっ♡ しこっ♡

ビンビン♡に腫れ上がった乳首に触手が巻き付き、そのまま扱くように上下される。粘液をローション代わりにして、男性のオナニーを思わせるスピードで扱かれると乳首が引っ張られていやらしく形を変えた。

少しずつ高まっていく快感に、下腹部がどんどん熱くなる。

「あッ♡ ああんッ♡ しこしこ♡らめえッ♡♡」

「恭子さん、母乳マッサージで感じすぎだよ。俺は真面目にやってるのに……」

「嘘お……ッ♡ あ、やッ♡ 彗くんのエッチ……っ、んあッ♡」

「うん、嘘。今の冗談は分かりやすかったでしょ？ 恭子さんエロすぎるよ。一緒に住み始めたら毎日マッサージしてあげるからね。いっぱい母乳出るように一緒にがんばろ」

「らめえ……ッ♡ こんな、もうッ……♡」

「イッチやう？ でもまだマッサージ終わらないよ？ 次はきゅつきゅつ♡てするね。やわらかくなるように」

ぎゅむっ♡ ギゅむっ♡

乳首に巻き付いていた触手に優しく力が込められて、咄嗟に「もっと強く」ってしてしまった。けれど、乳頭から乳首と乳頭の境目まで巻き

付かれてぎゅむッ♡とされて、そのたびに思考が飛んでいく。

「あッ♡ あッ♡」

「きゅっきゅっ♡ きゅっきゅっ♡ 頑張れ恭子さん♡」

「ん、んあっ、あッ♡♡ だッ♡ めえっ♡ これっ♡ いくッ♡」

「イってもいいよ、でも最後まで頑張ろうね。次は乳搾りみたいのに、ぎゅううっ♡」

親指と人差し指で優しく摘ままれているような感覚だったのが、平たく潰されるように摘まみ上げられて頭の中で一瞬何かが光った気がした。ダメ押しのように、ぐにゅぐにゅ♡と潰されたまま揉まれてピクンッ♡とまた腰が跳ねる。

「ああ……ッ♡ ぐ……ッッ♡♡」

「イっちゃった？ まだこねこね♡してないのに、乳首締め上げられただけで乳首イキしちやったね。次はこねこね♡ってするよ、恭子さん。」

恭子さんの乳頭に触手ぐりぐり♡って押しつけて、いろんな方向にこねこね♡するからね。舌よりも気持ちいいと思うよ」

「だ、だめ……っ♡」

「こねこね♡してって、さっきおねだりしてくれたもんね」

「だっ♡ めええッ♡♡」

こりゅこりゅこりゅこりゅこりゅ♡♡

舌よりも重量感のある触手が私の乳頭を潰すと、そのまま弄ぶようにこねられる。唾液よりもぬるぬるとした粘液で往復されるから、舌で舐められるよりも滑らかに刺激されるし、動きも速い。

それでも一瞬「まるで二人の彗くんにたくさん舐められているみたいだ」と思った。そう思うと、膣がきゅん♡きゅん♡と締まってまたイク準備を始める。

「おッ♡ あ、ッ、んあっ♡ 乳首こねこね♡らめえッ♡ あっ、んんッ

♡

「恭子さん、腰がカクカク♡って揺れてるよ。ちんぽが欲しいのかな？
いやらしいね。母乳マッサージが終わったらくさん突いてあげるか
ら、今は舌で我慢してね」

ぢゆるるっ♡ れろれろれろっ♡

いつの間にか彗くんに足を掴まれて、カクつく腰を触手で固定されな
がらおまんこに舌を入れられた。

「やッ……♡ おああゝゝッ♡ ちゅこちゅこ♡ しないれえッ♡♡」

こりゅっ♡ こりゅっ♡

ぢゅこッ♡ ぢゅこッ♡ ぢゅこッ♡ ぢゅこッ♡

クリトリスも一緒に食べられて、ちゅぽちゅぽ♡と舌を出入りされる
と頭が真っ白になって喉の奥が震えた。

「触手もいいけど、舌も気持ちいいでしょ？ 俺の全部を使って恭子さ

んを可愛がつてあげるからね」

「やだやだあッ♡ あッ♡ ぐんッ♡ それだめえッ♡ イくッ♡」

「はあっ……恭子さんのおまんこ美味しいよ。ちゅこちゅこ♡してちゅうちゅ♡しちやおう」

ちゅぷッちゅぷッちゅぷッちゅぷッ♡♡

ちゅるるるるるる♡♡♡

クリトリスを親指で押さえつけられながら、舌で膣内を掻き回されて、思い切り吸われた。乳首をこりこり♡と触手に遊ばれている感覚が手伝い、一気に快感が高まる。

「んあああッ♡♡ らめ、らめっ、あッ、ん♡ イくッ♡ イくイくイグッ♡♡♡」

ぷしゅっ♡♡ ぷしゅあああっ♡♡♡

彗くんの顔に思い切り潮をかけてしまった。でも、彗くんの舌は止まっ

でも触手は止まってくれないからイったまま乳首をこりゅこりゅ♡♡と弄られて、腰がビクビク♡と小刻みに揺れ続けた。

「んん……♡ 可愛い……」

「やだやだやだ♡ もうやらあ♡ 乳首やめてえ♡」

「あと最後にちゅうちゅ♡って吸ったら終わりだから頑張っ♡」

「やだあ♡ 吸っちゃ、やだあ♡ まだイってるからあ♡ おかしくなちゃう♡」

「俺も全部見せたから、恭子さんも全部見せて。可愛いところも、エロいところも、おかしくなるところもだよ」

「彗くんが私に覆い被さり、酷い顔をしているであろう私に優しくキスをした。」

「こんな顔見られたくない。こんな間近で、こんな酷い、だらしない顔。」「彗く……♡」

「全部好きだよ」

「んああっ♡」

ぢゅううううううううッ♡♡♡

乳首に張り付いた触手の先が、私の乳頭を思い切り吸引し、ひねり上げる。

「おッ♡♡♡」

ぷしゅあああッ♡♡♡

瞬間、腰を大きく上げて達した私はさつきよりも激しい潮を吹きながら腰を痙攣させてしまう。

（あああ……いっぱい出ちゃった……っ♡）

思い切り粗相をしてしまった気持ちで情けなさど気持ちよさでぐちゃぐちゃになっている私を見て、隼くんは幸せそうに微笑んでいた。

「可愛い」

（可愛いわけがないのに……！）

彗くんが、乱れた私の呼吸を落ち着かせるようなキスをする。優しく甘ったるいそのキスを浴びていると、何故か急に全てが恥ずかしくなった。

「もうやだ！」とベッドから落ちそうな布団を引っ張って、そこに潜り込む。

「恭子さんってば」

最初は「子どもみたい」と笑っていた彗くんだったけれど、しばらく経ってもなかなか出てこない私に段々焦って、最後は「恭子さん？ 息苦しくなっちゃうよ？ 出てきて？」と心配そうに言ってきた。

いつもの優しい声だ。こんなに優しい声をしている人なのに、どうしてエッチのときはあんなに意地悪になるんだろう。単純に疑問だ。

（優しいくせに、優しくない！）

一度意地を張ったらやめどきが分からなくなつて、しょうがないからそこからまた数分間、彗くんを困らせてやった。